

平成22年度
岩手県高等学校教育研究会農業部会
第2回農業教育研究会

発表題

「豊かな人間性を育み、生徒一人ひとりの個性の伸長を図る
キャリア教育はどうあれば良いか」

(視点2 継続教育機関との連携や地域・産業界
との連携したインターンシップの在り方)

日 時 平成22年12月16日(木)～17(金)

会 場 サンセール盛岡、盛岡農業高等学校

発表校 岩手県立盛岡農業高等学校

～動物科学科における農業後継者の育成～

1 研究のねらい

これまで県内の農業高校は農業経営者や農業関連産業を支える優秀な人材を多数輩出してきた。今後もその使命は重要である。近年、農業従事者の高齢化と農業後継者の減少、耕作放棄地の増加、減反調整、資材や配合飼料等の価格高騰による経営圧迫など農業を取り巻く情勢は厳しい状況にある。「世界人口白書」によれば、世界全体の人口は約69億人に達し、来年中にも70億人を超えると予測されている。そして、人口増加による世界の食糧危機や、さまざまな問題がいま議論されている。その様な中、我が国では食料自給率の向上、農業後継者育成に関する対応が進められている。そこで農業高校における農業や農業関連産業を支える人材の育成が重要である。

本校ではこの10年間に2度の学科改編を行い7学科から6学科そして現在の5学科となった。畜産に関する学科も畜産科から生産科学科、そして動物科学科と改編しながら時代に対応した農業教育や農業担い手育成を行ってきた。特に、地域と連携したインターンシップ等の実践教育については以前から取り組んできた。平成20年度からは更に「地域産業の担い手育成プロジェクト事業」をすすめ長期間の現場実習、技術者等による実践的指導、教員の高度技術・技能研修などを行い人材育成に取り組んできた。そこでこの取り組みを含め動物科学科における農業後継者の育成について研究にした。

2 本校の概要

本校は動物科学科、植物科学科、食品科学科、人間科学科、環境科学科の5学科で全校生徒約600名である。寄宿舎には県内各地から約200名（主に動物科学科、植物科学科、人間科学科）が入寮し、寮生活をとおり農業について農業実体験を通じ学習するとともに、農業経営について強い志を持ったものが共に寮生活を送り夢を語りながら自己を高めている。

*昭和39年文部省指定自営者養成校。寮の新設。

平成10年には文部省指定農業経営者育成校と改めた。

在籍状況・就農希望等調査（平成22年度）

学科名	1 学年				2 学年				3 学年			
	在籍数	左記在籍数のうち			在籍数	左記在籍数のうち			在籍数	左記在籍数のうち		
		専業農家	兼業農家	将来就農希望者		専業農家	兼業農家	将来就農希望者		専業農家	兼業農家	将来就農希望者
動物科学科	40	6	8	16	39	7	8	12	38	5	6	21
植物科学科	40	9	18	29	38	3	15	17	38	10	8	21
食品科学科	41	2	12	6	38	2	6	5	41	2	9	1
人間科学科	40	2	4	3	36	1	8	3	39	3	8	3
環境科学科	41	1	9	11	38	2	8	10	41	1	3	7

3 後継者育成に関わる実践指導・研究の方法

- (1) 課題研究（専攻班学習）
- (2) インターンシップの実施（短期・長期）
- (3) 乳牛や肉牛共進会への参加
- (4) 削蹄の学習
- (5) 動物バイテクの取り組み
- (6) 当番実習（休日と冬期休業中を除く）朝5：00、夕方15：30

4 指導展開と分析

(1) 課題研究

専門的な知識と技術の深化、問題解決能力や自発的、創造的な学習態度を身につける

動物科学科の専攻班（2年生から課題研究や時間外の時間：2年生2単位、3年生4単位）

ア 畜産専攻班 イ グリーンライフ専攻班 ウ 社会動物専攻班

(2) 動物科学科の地域・産業界との連携、校外活動による実践教育の展開

職業観の育成、技術の習得、実践技術経営に対する意識将来への意欲を高め進路につなげる

ア インターンシップの実施

(ア) 長期研修：北海道酪農研修

(イ) デュアルシステム実習：家畜改良センター岩手牧場

畜産農家

(岩手県農業研究センター畜産研究所H20年度)

(ウ) 実習先と主な実習項目

①実習先：家畜改良センター岩手牧場、岩手県農業研究センター畜産研究所

実習項目（防疫、飼養管理、搾乳、糞尿処理、粗飼料生産、衛生管理、繁殖管理、講義、種雄牛施設見学、短角放牧見学）

②実習先：畜産農家

実習項目（飼養管理、衛生管理、堆肥の活用、草刈り実習、市場見学、高泌乳牛の管理、熊の被害防止対策、毛刈り、除角、堆肥施設見学、サイレージ調整、乾草調整、肥料散布、受精卵移植作業見学）

(3) 乳牛や肉牛共進会への参加

乳牛や肉牛の共進会参加に向け、年間をとおし畜産専攻の生徒が毎日出品牛の洗浄、調教、毛刈りなどを通し管理技術を身に付けると共に生徒間の連携や自営者としての資質を身につけている。

* 21年度は滝沢・雫石共進会で経産牛と未經産牛の部でそれぞれ名誉賞を受賞している。

* 参加している共進会：岩手県北共進会、滝沢雫石共進会、八幡平市共進会、岩手町共進会、岩手県共進会、岩手県枝肉共励会

(4) 削蹄講習

畜産経営の中でも特に重要な技術であり年間数回の削蹄と併せて学習を深めている。生徒は削蹄の意義を理解し強い関心を持ち学んでいる。

(5) 動物バイテクの取り組み

学校に隣接している県畜産研究所のバイテク施設で、年間数回の受精卵採卵の際は学校で採卵後、そちらの施設を借用し検卵と凍結を学習している。現在、年に1～2回受精卵の採卵を行っている。自家産の受精卵の産子が増えている。

(6) 当番実習（休日と冬期休業中を除く）朝5：00、夕方15：30

3年生を当番長として4名の当番で飼料給与・搾乳機械の準備から洗浄まで当番生徒が行っている。上級生は下級生の面倒を見ながら手際よく行き尊敬される存在である。また、分娩など心配な牛がいる場合当番以外の生徒も寮から来て様子を見たり、当番と共に朝夕の管理を手伝うなど意欲的な生徒が育っている。

(7) 地域と連携した研究活動（八幡平市の会社）

酵母を活用した堆肥発酵について企業と連携し取り組み、早期完熟堆肥として圃場に散布している。畜産農家の生徒にとって堆肥処理は経営の課題でもあり関心も高い。

(8) 職員の研修 農業機械、家畜人工授精、削蹄などの研修に参加し知識や技術を身につけている。

5 評価

(1) 実習日誌の内容

(2) 事業所からの生徒評価

(3) 総合実習、課題研究への評価

6 成果（生徒のアンケートより）

ア 経営方法、経済的な視点が必要だということがわかった

イ 施設設備の有効活用がなされていた

ウ 経営者の生の声を聞き農業の素晴らしさを学んだ

エ 地域を支える農業の役割と重要性を学んだ

オ 将来の農業自営に向け意識高揚につながった

カ 農業の素晴らしさを学び授業や実習に積極的になった

キ 実習先の農業経営へのこだわりや独自の経営手法を学ぶことができた

7 課題（教員の意見）

(1) 研修先に対する課題

ア 夢もてる農業経営を行っている農業経営者の選定

イ 目標の明確化、研修の在り方

ウ 研修先への謝礼の予算

エ 事前指導の必要性

オ 卒業生が働いている現場での生の声を聞き進路に役立てる

(2) 学校としての課題

ア授業時間の確保と評価

イ学習との一貫性、系統的な流れとして困難

ウ自然条件に左右されるため柔軟な計画、実施

エ教員の授業と併行した生徒の送迎や巡回指導が困難

オ県外の生徒の旅費の予算

8 進路（農業に関連する進学、就職について）

(1) 進路状況：21年度（生産科学科36名中）

21年度は多くの生徒が農業関連大学への進学や就職を決定している。

岩手県立農業大学校（酪農・肉畜）5名、北海道農業専門学校（酪農）5名、
農業系短大1名、本校特別専攻科5名、北海道酪農研修1名、農業関連就職3名、
酪農ヘルパー2名・・・計22名

*進学や研修の生徒は農業後継者をめざしている。

(2) 進路（希望）状況：22年度（動物科学科38名中）

岩手県立農業大学校4名、農業系大学4名、本校特別専攻科1名、
北海道酪農研修1名、農業関連就職10名、酪農ヘルパー2名

*進学や研修の生徒は農業後継者をめざしている。

9 おわりに

これまで学科改編により、学科の名称変更や時代の流れに対応した学習内容を取り入れながら畜産の後継者を育てるという使命を担ってきた。また最近新たな傾向として、非農家であるが酪農に強く興味関心を持ち酪農ヘルパーや農業大学校などに進む生徒が出てきた。このことは事は大きな成果であると思う。酪農に熱心に打ち込む生徒に感化され、酪農の魅力や農業の素晴らしさを知り非農家の生徒も意欲的に取り組むようになってきている。農業後継者を志す生徒が減少し農業教育を展開する上で課題も多いが、今後も本校の教育理念につながる部分は学科の柱として継続しながら、農業後継者の育成や地域産業で活躍する人材を育てていきたい。

10 参考文献

(1) 平成21年度地域産業の担い手プロジェクト成果報告書 岩手県

(2) 平成21年度地域産業の担い手プロジェクト成果報告書 熊本県

*資料

インターンシップへの参加前と参加後の自己評価

